

連載コラム



みずき野と その周辺の 植物と昆虫

第 45 回

ヒルガオ科の植物たち



もとよし ふさお
本吉 総男

2018 年 10 月

みずき野周辺に見られるヒルガオ科の植物のうち、在来種はヒルガオとコヒルガオのみで、他はすべて外来種です。もちろん、ハマヒルガオやノアサガオのように守谷付近では見られない在来種もあります。外来種といっても、私たちに馴染みの植物があり、とりわけアサガオは古くから日本に伝わり、多くの美しい品種がつくられてきました。また、食品として重要なヒルガオ科の作物にサツマイモがあります。ヒルガオ科の植物はすべて漏斗状の花を咲かせ、また切ったり傷つけたりすると粘りけのある白い汁（乳汁）を出します。今回はみずき野周辺に見られるヒルガオ科の植物を紹介します。

1 ヒルガオ、コヒルガオ、セイヨウヒルガオ

ヒルガオは北海道から九州までの日本列島と朝鮮半島、中国に、またコヒルガオは本州、四国、九州、東南アジアに分布しています。開花期はいずれも6~8月です。

ヒルガオの花はコヒルガオの花と比べると、やや大型ですが、色や形からはほとんど区別が付きません。花色はどちらも白や薄いピンクです。しかし両種は葉の形によって区別できます。ヒルガオとコヒルガオの葉は基部（花の柄につく部分）の左右に出っ張りがあります。この部分を「耳」と呼んでいます。ヒルガオの葉の耳は丸みのある3角形で先はとがっています。コヒルガオの葉の耳は4角形に近く、耳の上辺はややへこんでいます。

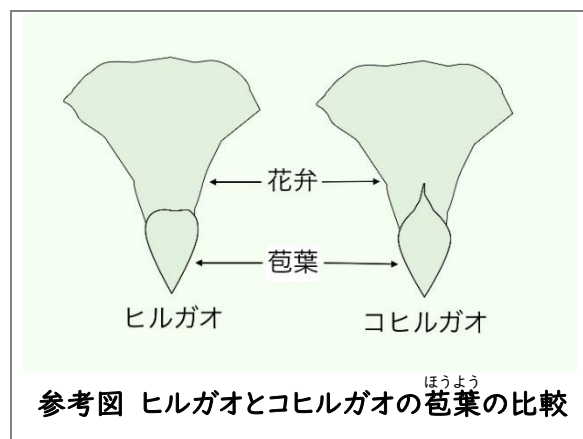


ヒルガオ 6月上旬 本町地区



コヒルガオ 6月上旬および7月上旬 本町地区

両種をもっとはっきり区別できる場所があります。ヒルガオやコヒルガオの花には比較的大きな2枚の苞葉（花の付け根近くにおいて、花を支えている特殊な葉）が見られます。この苞葉の形がヒルガオとコヒルガオでは明らかに異なっています。分かりやすい写真がなかったので、イラストで示します。ヒルガオの苞葉は先端が扁平に近く、コヒルガオの苞葉は先端がとがっています。



ヒルガオとコヒルガオは、主として地下茎を伸ばして旺盛に繁殖します。畑地では耕運機で切断された地下茎からも発芽して繁殖するので、防除しにくい雑草です。花はたくさん咲きますが、実をつけるものはごく少ないようです。しかし、数少ない種子も正常に発芽するので、繁殖には一役買っていると思われます。

セイヨウヒルガオはヨーロッパ原産の帰化植物で、日本各地に広がっています。6～8月にヒルガオやコヒルガオに似た白または薄いピンクの花を咲かせます。葉は幅が前2種より広く、基部（花の柄につく部分）には先の丸い耳をもっています。苞葉は小さく、花の下部をおお覆うことはなく、左右に開いているので、前2種とは容易に区別できます。

セイヨウヒルガオも地下茎によって繁殖しますが、種子も普通にできるようです。



セイヨウヒルガオ 5月下旬 本町地区

2 マルバルコウ

熱帯アメリカ原産の一年草で江戸末期に観賞用として渡来したマルバルコウは、現在は帰化植物として道ばたなどに自生しており、直径2センチほどの小さな朱色の花を8～10月頃に咲かせます。



マルバルコウ 9月下旬 本町地区

近縁でマルバルコウとよく似た花をつけるルコウソウは、やはり熱帯アメリカ原産で、江戸時代に渡来しました。葉は長楕円系ですが、葉の中心までいくつも裂けていますので、イラストに示すように^{くし}櫛の歯が並んでいるように見えます。野外に自生しているものもあるそうですが、みずき野周辺では見たことがありません。



参考写真 モミジルコウ
10月上旬、東京都木場公園内
「帰化植物見本園」にて撮影

ルコウソウの写真は持っていませんが、ルコウソウとマルバルコウとの雑種、モミジルコウの写真を参考のため載せておきます。ルコウソウの葉ほど切れ込みは極端ではありませんが、モミジルコウの葉も^{くし}櫛状の切れ込みをもっています。

3 ホシアサガオとマメアサガオ

ホシアサガオは熱帯アメリカ原産、マメアサガオは北アメリカ原産の一年草で、両種とも戦後に日本に入ってきました。現在は道ばたによく見かけます。花は両種とも直径2センチ足らずで、7~9月に咲きます。ホシアサガオは中心が^{こうしよく}紅紫色で周辺が薄いピンク、マメアサガオは白色または薄いピンクです。



ホシアサガオ 10月上旬 同地地区



マメアサガオ 9月下旬 本町地区

4 マルバアサガオ

マルバアサガオは熱帯アメリカ原産の一年草で江戸時代中期に観賞用に導入されたようです。花期は7~9月。花の直径は5~8センチあり、アサガオに似て花色は美しく、変化に富んでいるので、観賞用として庭に植えられることもあります。野生化しているものもあります。葉はハート形で短い毛が生えていますが、目立ちません。アサガオの葉は3つに裂けて、毛が密生しているため、マルバアサガオとの識別は容易です。



マルバアサガオ 9月上旬 第1調整池



マルバアサガオ 9月上旬 第2調整池

5 アメリカアサガオ

アメリカアサガオは熱帯アメリカ原産の一年草で、日本には戦後に帰化したようです。葉にははっきりとした3~5つの切れ込みがあり、切れ込みによって突き出た葉の先端はとがっています。花は紫またはピンクで、直径は3センチほど。7~10月頃に咲きます。

この花を初めて見たのは2004年10月のこと。さくらの杜公園の東の道路脇でした。その後3年ほど同じ場所にこの植物を見かけましたが、以後は絶えてしまったようです。それ以来、みずき野周辺では見ておりません。写真は残念ながら撮っていませんでしたが、スケッチしたものを載せておきます。



アメリカアサガオ(スケッチ)
10月上旬 さくらの杜公園東隣接地

6 サツマイモとヨウサイ

サツマイモとヨウサイは食用作物です。サツマイモは芋いも(植物学では塊根かいこんという)、ヨウサイは葉を食用とします。

サツマイモは熱帯アメリカ原産の多年草で、この辺りでは花を見る機会は滅多にありませんが、沖縄のような暖地では夏に直径4~5センチのアサガオに似たピンクの花が咲きます。サツマイモはおそらくメキシコに起源し、そこでは少なくとも紀元前3000年以前から栽培されていたという説があり、またヨーロッパには新大陸を発見したコロンブスによって15世紀末に伝えられたそうです(田中正武著『栽培植物の起源』NHKブックス)。中国でも、李時珍りじちん

の著書『^{ほんぞうこうもく}本草綱目』(1590 年刊)にサツマイモについての記載があり、かなり古い時代から栽培されていたようです。

サツマイモは日本には17世紀前半に中国から琉球を経て九州に伝わりました。儒学者で蘭学者の^{あおきこんよう}青木昆陽は『^{ばんしょこう}蕃薯考』(1734 年)を著し、^{きゅうこうさくもつ}救荒作物として全国への普及に努めました。^{ばんしょ}蕃薯は江戸時代のサツマイモの呼び名と思われます。現在はカンショ(甘藷)とも呼ばれています。



サツマイモ畑 9月中旬 貝塚地区

江戸時代のみでなく、サツマイモは、戦中・戦後の食糧危機を救う^{きゅうこうさくもつ}救荒作物でした。当時は腹を満たすため、あまり美味しくなくても、多産で大きな芋であることが重要でした。そのような芋では、「沖縄100号」という品種が記憶にあります。贅沢になった今は当然甘くて美味しい品種が好まれ、菓子の材料としてもよく使

われています。また、デンプンやアルコールの原料としても重要です。

ヨウサイは熱帯アジア、おそらくインドに起源する多年草で、秋に直径5センチほどの白からピンクのアサガオに似た花が咲きます。ヨウサイには2つの型があり、葉が細くて矢じりのような型のは湿った土壤に適し、葉の広い型のは水田で育ちます。写真に示したものは前者です。ヨウサイは沖縄では古くから栽培されていますが、いつから日本のその他の地で栽培されるようになったのかは不明です。ヨウサイ(蕹菜)はしばしばクウシンサイ(空心菜)という名で流通していますが、植物学ではヨウサイを正式な和名としています。



ヨウサイ 10月中旬 貝塚地区

アサガオのことなど

ヒルガオ科の植物について書くと、やはりアサガオのことにはどうしても触れておきたい気がします。アサガオをみずき野周辺の散歩道で見かけたことはありませんが、日本人好みの植物のひとつですから、みずき野にもアサガオの愛好家がかなりいると思います。

もっとも最近では、アサガオより花付きがよく、育て易く、アサガオと同じように大きな美しい花を咲かせるセイヨウアサガオの園芸品種「ヘブンリーブルー」やノアサガオの園芸品種「オーシャンブルー」も人気があります。でもやはり、私は古来から続くアサガオにより親しみを持っています。



アサガオ 7月中旬～9月下旬 わが家の庭



セイヨウアサガオ (品種ヘブンリーブルー)
7月中旬 わが家の庭



ノアサガオ (品種オーシャンブルー)
10月中旬 わが家の庭

アサガオの原産地ははっきりしませんが、京都大学の探検隊がヒマラヤ地方で見つけており、また、中国で古くから栽培されてきたことから、ネパールから中国に導入されたものかもしれないと考えられているようです(週刊朝日百科「世界の植物」16)。日本へは平安時代

(794~1192年)の初期に中国から渡来したと考えられています。江戸時代には多彩な品種がつくられ、アサガオの品種改良は現在に至るまで続いています。

第6回「ハギ」と名の付く植物たち」に有名な山上憶良(660~733頃)の秋の七草を詠んだ歌を引用していますが、ここに再度載せておきます。

はぎ おばなくずばな
萩の花 尾花 葛花 なでしこの花
おみなへし ふじばかま あさがほ
女郎花 また 藤袴 朝顔の花
やまのうえのおくら
山上憶良(万葉集 1538)

この中に「朝顔」と称する花が入っています。しかし山上憶良は、平安時代以降に入ってきたアサガオを見てはいないはずで、この朝顔はキキョウであるというのが定説ですが、ムクゲであるという説もあります。

平安時代に入ると、清少納言は枕草子に下記のように記しており、キキョウとアサガオははっきり区別されています。また「草の花は」ですから、アサガオはムクゲではあり得ません。

なでしこ から やまと
草の花は撫子、唐のはさらなり、大和のも、いとめでたし。
おみなえし ききやう あさがお かるかや きく
女郎花。桔梗。朝顔。刈萱。菊壺すみれ。

アサガオといえば、源氏物語「朝顔」の帖が印象的です。ヒロインは朝顔の君、光源氏に恋い慕われながら、源氏に心を許さなかった唯一の女性です。源氏の父(桐壺帝)の弟、式部卿宮の娘ですから、たいへん身分の高い姫君です。「朝顔」の帖は、父、式部卿が亡くなったため、齋院(賀茂神社に奉仕する身分の高い未婚の女性)を退職して、自邸に戻ったのちの物語です。この身分の高い姫君への源氏の激しい恋慕は、正妻である紫の上を大いに悩ませました。

朝顔の君という名は、源氏が朝顔の花に添えて姫君に贈った口説きの歌によって名付けられたものです。

をり
見し折の 露わすられぬ 朝顔の 花のさかりは 過ぎやしぬらん

(一目お会いしたときのお美しさは忘れられません。
でもその朝顔の花の盛りは過ぎてしまうのではないのでしょうか)

このとき源氏は32歳、朝顔の君の年齢は不明ですが、まさに花の盛りであるように思います。



話を変えて、ヨルガオについても一言述べておきたいと思います。残念ながら写真がありません。ヨルガオは熱帯アメリカに原産し、日本へは明治時代の初めの頃に入ってきました。7~9月頃、直径10センチほどの大型の白い花を夕刻から朝にかけて咲かせます。アサガオは早朝に咲く爽やかな感じですが、ヨルガオは対照的に夜咲く^{ようえん}妖艶な花という印象です。来年は久しぶりに育てて見たいと思っています。

ヨルガオはしばしばユウガオと呼ばれていますが、正確にはユウガオはウリ科の植物で、果実が長いユウガオ(別名ナグユウガオ)と球形の大きな実をつけるフクベ(別名マルユウガオ)があります。ヒョウタンをつけるものはユウガオ(ナグユウガオ)の仲間です。一方、フクベの実からは^{かんぴょう}干瓢がつくれます。どちらも花はアサガオに似て、白色で、夏の夕方に咲き、翌朝にしぼみます。

清少納言は枕草子に次のように述べています。

夕顔は、花のかたちも朝顔に似て、
言い続けたるにいとをかしかりぬべき花の姿に、
実の有様こそ、いとくちをしけれ

(夕顔は、花のかたちも朝顔に似て、朝顔、夕顔と並べてもおかしくないほどの花であるが、実の様子はなんとも情けないことだ)

このユウガオがフクベだとすると、清少納言としては、確かに「いとくちをし」いことでしょう。